

打ち合わせにおける談話構造の修辞機能からの分析

著者	田中 弥生
雑誌名	言語資源ワークショップ発表論文集
巻	1
ページ	297-308
発行年	2023
URL	http://doi.org/10.15084/00003745

打ち合わせにおける談話構造の修辞機能からの分析

田中 弥生 (国立国語研究所 研究系) *

An Analysis of Discourse Structure of a Meeting from a Rhetorical Function Point of View.

Yayoi TANAKA (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

要旨

本研究は、修辞機能分析の分類法による日常会話分析の一環として、打ち合わせの談話の談話構造を修辞機能から検討するものである。修辞機能とは、「話し手書き手が発信する際に、言及する対象である事態や事物、人物等を捉え表現する様態を分類し概念化したもの」と定義する。本発表では、『日本語日常会話コーパス』に収録されている地域活動ボランティアによるイベント企画の打ち合わせ談話を対象に、イベント企画にかかわる会場、日程、募集方法などの検討の段階について、修辞機能から談話構造を検討した。分析の結果、話題内容が変わるきっかけの発話の修辞機能の特徴が見られること、全体的に頻度の高い修辞機能があること、話題内容によって用いられる修辞機能があることがわかった。

1. はじめに

打ち合わせの談話に関して、職場の談話における文末表現、疑問表現、敬語、自称詞、談話進行や談話構造、談話管理など様々な観点からの分析が行われている(渡邊 2014a,b, 現代日本語研究会 2011)。また、雑談や相談など様々な談話の構造分析が行われている(ザトラウスキー 1993, 鈴木 2002, 筒井 2012)。本研究は、地域活動のボランティアによるイベント企画打ち合わせの談話について、修辞機能の観点から分析し、談話構造を検討するものである。修辞機能とは、いわゆる文章の技巧や説得法のレトリックではなく、ここでは、「話し手書き手が発信する際に、言及する対象である事態や事物、人物等を捉え表現する様態を分類し概念化したもの」と定義する。この修辞機能は脱文脈の度合いと関連づけられている。ここでの文脈とは話者の「いま・ここ・わたし」とし、脱文脈度は「コミュニケーションが行われている時空とその発話内容との時間的・空間的距離の程度」とする。分析には、修辞機能分析の分類法⁽¹⁾を用いる。この分類法は、修辞ユニット分析(佐野 2010, 佐野・小磯 2011)を元に、日本語文法の枠組みで修正を加えたものである。テキストの分析単位(概ね、日本語文法の節に相当)ごとに、述部と主語・主題の分類から修辞機能が特定される。修辞機能の脱文脈度の高低により、一般的な内容か個人的な内容か、発話の時空に依存しない内容か依存する内容か、抽象的なことか具体的なことかなどを示すことができる。例えば、子供は目の前のことから話せるよ

* yayoi@ninja.ac.jp

(1) 現在手順書を執筆中である。

うになり、成長とともに過去のことや、明日のこと、その場にはいないおばあちゃんのことなど、時空を離れた発話ができるようになる。「それ、ちょうだい」と同じ時空にいる親に言うのは文脈化しており、「はやぶさは北海道新幹線だよ」は同じ時空にいなくても伝えられるため脱文脈度が高い。

これまで、児童作文、家族の談話、相談の談話、高齢者グループの談話など（田中ほか 2021, 田中・小磯 2020, 田中 2017, 田中ほか 2022）の分析から、目的や話題内容、状況によって、用いられる修辞機能が異なり、脱文脈度は推移することが明らかになっている。田中ほか（2020）では、手順を説明する談話における、説明の各ステップにおいて、目の前の手順説明に関わる修辞機能が用いられながらも、合間に個人の習慣や過去の経験や一般的なことが話され、脱文脈度が様々に推移することが明らかになっている。

本発表では、『日本語日常会話コーパス』に含まれる、公共施設での地域活動の仲間たちとのイベント企画打合せの談話を分析対象とし、それぞれの発話について、言語表現から修辞機能と脱文脈度を特定し、打ち合わせの話題内容によって、どのように発話が推移しているか検討を行う。以下、第2節で分析データと分析方法について説明し、第3節で分析結果と考察を述べ、第4節でまとめと今後の課題について述べる。

2. 分析データと分析方法

2.1 分析データ

本研究の分析対象として、『日本語日常会話コーパス (Corpus of Everyday Japanese Conversation, CEJC)』（小磯ほか 2022）に収録されている公共施設での地域活動の仲間たちとイベントの打合せ（T004 _ 017 17分、参加者7名）の書き起こしデータを用いる。イベントはボランティアの会を中心とする実行委員会と施設の管理者が協力して企画・運営されるもので、本データの参加者の1名が管理者で、それ以外はボランティアの会のメンバーである。

2.2 分析方法

修辞機能分析は、Rhetorical Unit Analysis (Cloran 1994, 1999) を日本語に適用した修辞ユニット分析 (佐野 2010, 佐野・小磯 2011) を元に、日本語文法の枠組みで修正を加えた分類法である。分析手順は、次のとおりである。

1. 分析単位（メッセージ）に分割し、分析対象を特定する。
2. 分析対象のメッセージについて発話機能を分類する。
3. 発話機能が「命題」のメッセージについて、時間要素と空間要素を分類する。
4. 発話機能・時間要素・空間要素の組み合わせから、修辞機能と脱文脈度を特定する。

以下に手順の概要を示す。

2.2.1 分析単位の分割と分析対象の特定

分析単位であるメッセージは概ね節に相当するが、連体修飾節は独立したメッセージとして扱わない。メッセージは「定型句類」（相槌、挨拶、定型句、節の形でないものなど）、「主節」（単文、及び主節）、「並列」（従属度の低い従属節）、「従属」（従属度の高い従属節）、「引用」（“と思う”などで引用されている部分）に分類する。

2.2.2 発話機能・時間要素・空間要素

メッセージの種類が「主節」「並列」「引用」に分類されたメッセージについて、発話機能・時間要素・空間要素を分類する。表1に示したように、これらの組み合わせから修辞機能と脱文脈指数が特定される。【行動】[1]がもっとも文脈に依存した表現で、【一般化】[14]がもっとも脱文脈度の高い表現である⁽²⁾。

表1 発話機能・時間要素・空間要素からの修辞機能と脱文脈指数の特定

定義	↑ 高 ↑空間的距離のレベル ↓ 低						一般化 [14]
状況外		報告 [9]	状況外回想 [10]	予測 [11]		推量 [12]	説明 [13]
状況内		参加	実況 [2]	状況内回想 [3]	状況内予想 [5]		観測 [8]
参加					計画 [4]	状況内推測 [6]	
空間要素	今ここわたし	← 低 ← 時間的距離のレベル → 高 →					
時間要素		現在	過去	未来意志的	未来非意志的	仮定	習慣・恒久
発話機能		提言	命題				

発話機能は「提言」か「命題」に分類する。「提言」は、品物・行為の交換に関する提供・命令で、基本的には同じ時空に存在する相手に働きかけたり、会話者同士の行為にかかわる発話内容が該当し、【行動】[1]と特定される。例えば、同じ時空にいる相手への「このトマト見て!」「お醤油を取って」のような行為や物を要求する場合である。「命題」は、情報を交換する陳述・質問で、「私はトマトが大好き」「このトマトは真っ赤だね」「トマトはナス科の植物だ」などが該当する。発話機能が「命題」のメッセージについて、このあと時間要素と空間要素を認定する。

時間要素は、話者のいる時間を基準として、メッセージで表現されている出来事がいつ起こったかを示す要素である。基本的にテンスや時間を表す副詞などによって表現される。図1に時間要素の分類を示す。「習慣・恒久」⁽³⁾「現在」「過去」「未来意志的」「未来非意志的」「仮定」に分類する。「太郎がトマトを美味しそうに食べている」は「現在」、「昨日食べたトマトは美味しかった」は「過去」、「来年はトマトを育てよう」は「未来意志的」、「私はトマトが大好き」は嗜好であるため「習慣・恒久」、「トマトはナス科の植物だ」は恒久的と判断し「習慣・恒久」に分類する。

空間要素は、話者のいる場所を基準として、メッセージの中心との空間的距離を示す要素で、主語、主題、述部の主体から判断する。図2に空間要素の分類を示す。「参加」「状況内」⁽⁴⁾「状況外」「定義」に分類する。「私」「あなた」が主語であれば「参加」、「太郎がトマトを美味しそうに食べている」は太郎が話者と同じ時空にいると考えられるので「状況内」、「昨日食べたト

(2) 以下、修辞機能を【】で、脱文脈指数を[]で示す

(3) 「習慣・恒久」には、属性、嗜好、評価も含む。

(4) 「状況内」には、話者の身体や所有物、思想、また、その談話の中で話題になっている事柄も該当すると考える。

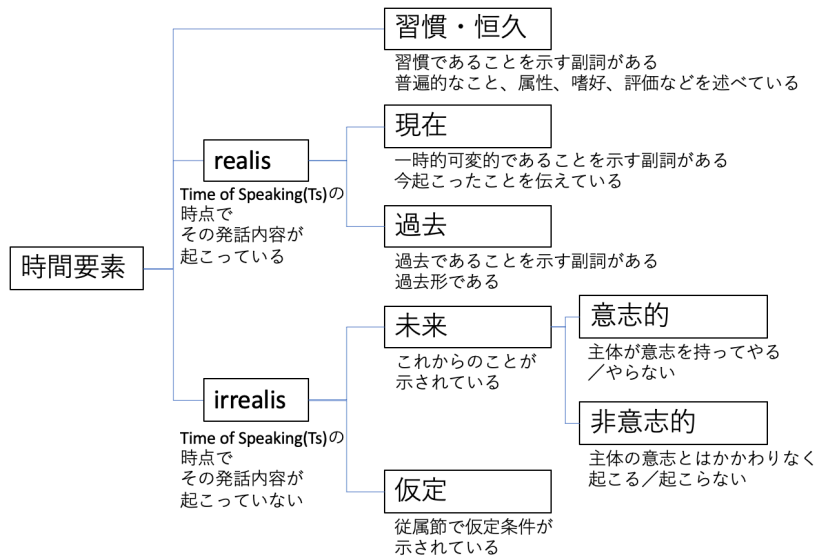


図1 時間要素の分類

「トマトは美味しかった」「トマトはあっちの八百屋のが美味しい」のトマトは話者のいる時空には存在していないと考えられるので「状況外」、「トマトはナス科の植物だ」はトマトという植物の性質一般を述べているので「定義」に分類する。

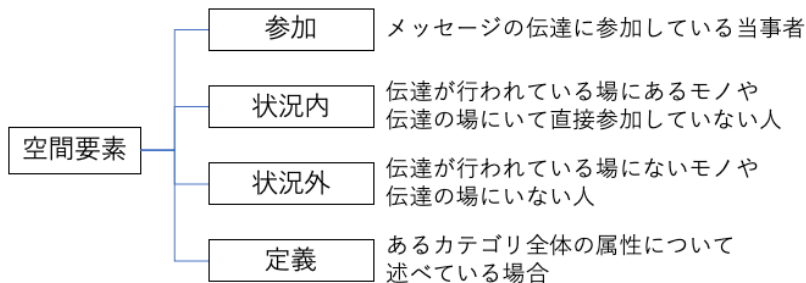


図2 空間要素の分類

2.2.3 修辞機能と脱文脈化度の特定

表1を参照し、発話機能、時間要素、空間要素の組み合わせから、修辞機能と脱文脈度を特定する。

3. 分析結果と考察

参加者ごとのメッセージ数を図3に示す。分析対象となる主節と並列は一ノ宮、塚田、土井の順で多く、他の参加者は相槌など、定型句類の使用が多いか発話が少ない。

分析対象の談話は、その話題内容から、1. 会場の検討、2. 日程検討、3. 募集、4. 原稿、5. 実地調査に分けられる。表2および図4に、話題内容ごとの修辞機能の頻度と割合を示す。全体

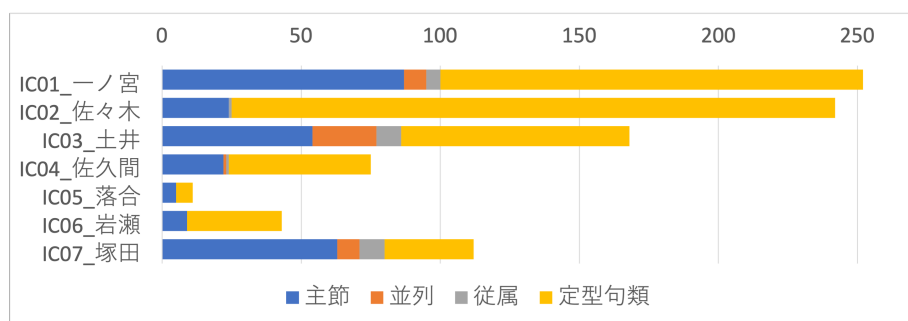


図3 参加者ごとのメッセージ数

では【説明】[13]と【観測】[8]が使用されており、1. 会場の検討と4. 原稿では同数なのに対して、3. 募集では【観測】[8]が【説明】[13]の約2倍、5. 実地調査では反対に【説明】[13]が【観測】[8]の約2倍となっている。また、1. 会場の検討と5. 実地調査では【自己記述】[7]が用いられている。

表2 話題内容ごとの修辞機能 [脱文脈指数]

修辞機能 [脱文脈指数]	1 会場の検討	2 日程検討	3 募集	4 原稿	5 実地調査	計
一般化 [14]	0	0	0	0	0	0
説明 [13]	14	5	17	9	37	82
推量 [12]	0	0	0	0	0	0
予測 [11]	1	2	0	2	7	12
状況外回想 [10]	7	0	6	0	0	13
報告 [9]	3	0	0	0	0	3
観測 [8]	14	7	33	9	17	80
自己記述 [7]	12	2	10	0	20	44
状況内推測 [6]	0	1	1	0	1	3
状況内予想 [5]	0	1	10	4	4	19
計画 [4]	7	0	5	3	8	23
状況内回想 [3]	3	1	4	0	0	8
実況 [2]	1	2	0	2	4	9
行動 [1]	0	0	0	0	1	1
計	62	21	86	29	99	297

話題内容ごと参加者別の修辞機能の出現を図5に示す。

図5からも、一ノ宮、土井、塚田の発話が多いことが確認できる。また、話題内容によって、会話に参加する人数が異なっていることがわかる⁽⁵⁾。

以下で、各話題内容ごとに、修辞機能の出現を見ていく。

⁽⁵⁾ この集計には図4の定型句類（相槌をうったり、「そうですね」と応答している発話）は含まれていない。

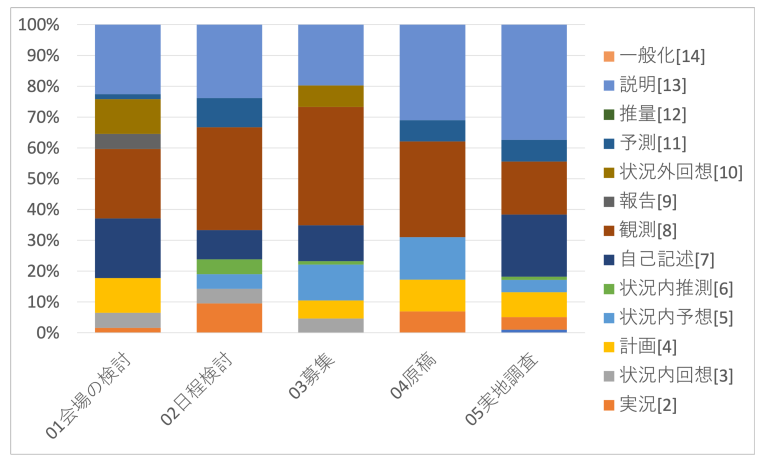


図4 話題内容ごとの修辞機能の出現割合

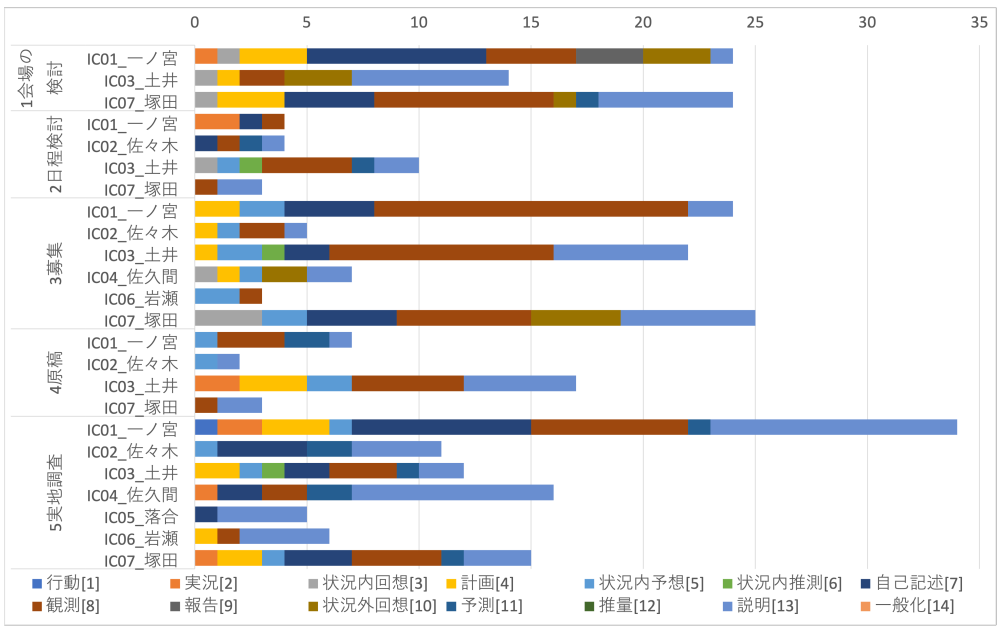


図5 話題内容ごと参加者別の修辞機能の出現

3.1 話題内容ごとの会話の流れと修辞機能

3.1.1 1. 会場の検討

1. 会場の検討の冒頭を、表3に示す。この話題内容の前に、このデータの始まりの部分として、「でもこれで（略）大体コースの形としては収まりそうな感じですね」「そうですね」という会話がある。その後、「それで」という話題を変える接続詞につづいて、それまで話していたコースの最後の場所の確認の発話があり、どこにするか、どのように予約するか、というやりとりが交わされる。なお、図5で示したように、1. 会場の検討では、実質的な発話は、一ノ宮、土井、塚田の3名によって交わされている。

冒頭の2つのメッセージについて、(1)に発話機能・時間要素・空間要素を示す。

表3 1 会場の検討の冒頭部分

発話者	発話	修辞機能 [脱文脈度]
IC01 一ノ宮	それで(R 第二)の区活: でラストでいいのかな:。	観測 [08]
IC07 塚田	いんじゃない?。楽で。	観測 [08]
IC02 佐々木	うん。	
IC03 土井	うーん。	
IC07 塚田	うん。	
IC03 土井	会場、最後までしてもね、鷺宮の時もそうでしたけど。やっぱ会場がね 最後がちがちになっちゃうと。	状況外回想 [10]
IC07 塚田	例の紙芝居やりましたよね?。	状況内回想 [03]
IC02 佐々木	うん うん。	
IC01 一ノ宮	やった。	状況内回想 [3]
IC02 佐々木	うん うん。	
IC01 一ノ宮	そう。	
IC07 塚田	一番いいですね?。	観測 [8]
IC02 佐々木	そうですね。	
IC03 土井	うーん。	
IC01 一ノ宮	えーと (R 峰松) さんが取ってくれたんだけど:。	状況外回想 [10]
IC07 塚田	そう そう そう。	
IC01 一ノ宮	今回は: だいじょぶかしら。	観測 [8]
IC07 塚田	え。それはだって 誰に取ってもらえるってゆってもいっぱいいるじゃん。	説明 [13]
IC01 一ノ宮	(R 第二)?。	観測 [8]
IC07 塚田	うん。	
IC03 土井	二カ月前: の抽選: 会に行くって感じ: ですか。	説明 [13]

(1) IC01 一ノ宮 それで (R⁽⁶⁾ 第二) の区活⁽⁷⁾でラストでいいのかな。

→ (命題&習慣・恒久&状況内 → 【観測】 [8])

IC07 塚田 いんじゃない?。楽で。 → (命題&習慣・恒久&状況内 → 【観測】 [8])

いずれも空間要素は省略されているが、「コースの内容は」のような語句が復元できると考える。打ち合わせの中で話題にしていることであるため、状況内に分類した。

この一ノ宮と塚田のやりとりを聞いて、管理者である土井は、過去の出来事を話し始め、塚田、一ノ宮も過去の出来事を話し、また、「今回はだいじょうぶかしら」と今回のイベントに話が戻る。この後、どのように申し込むか、誰に頼めるか、というやりとりが続くが、土井は管理者という立場から、施設側でどのような動きがあるかについて、主に【説明】 [13] で述べ、その中に、【状況外回想】 [10] 【状況内回想】 [3] で過去の出来事も交えながら伝えている。また一

⁽⁶⁾ R は仮名を表す

⁽⁷⁾ 区の施設。区民活動センター。

ノ宮と塚田は、誰に頼むのがいいかについて、【観測】[8] や【自己記述】[7] で話し合っている。表4に1. 会場の検討 の終了部分の会話を示す。

表4 1. 会場の検討 の終了部分

発話者	発話	修辞機能 [脱文脈度]
IC07 塚田	もう二カ月前に 抽選だから	説明 [13]
IC07 塚田	その前に押さえておかないとまずいんだよね。	観測 [8]
IC02 佐々木	二カ月前か。	
IC01 一ノ宮	うん。	
IC03 土井	そうですね そうですね。	
IC01 一ノ宮	そうだよね。	
IC02 佐々木	うーん。	

この話題は、塚田による「もう二カ月前に抽選だから」【説明】[13] 「その前に押さえておかないとまずいんだよね。」【観測】[8] が、次の話題へとうつるきっかけとなる。

3.1.2 2. 日程検討

表5に2. 日程検討の冒頭部分の会話を示す。

表5 2. 日程検討 の冒頭部分

発話者	発話	修辞機能 [脱文脈度]
IC03 土井	だからこれ えっと 日にち的には 一応十一月のどこかって感じですよ。	観測 [8]
IC01 一ノ宮	だ日 日程 決めたいよね。	実況 [2]
IC07 塚田	そうですね。	
IC03 土井	そうすると: 九月のたぶん一日ぐらいが抽選日になるから	予測 [11]
IC03 土井	その前ってことですよ。	観測 [08]

塚田の「もう二カ月前に抽選だから」【説明】[13] 「その前に押さえておかないとまずいんだよね。」【観測】[8] を受けて、土井が「だからこれ えっと 日にち的には 一応十一月のどこかって感じですよ。」【観測】[8] と、具体的な日程の話題を始める。ほぼ同時に一ノ宮は「日程決めたいよね」【実況】[2] と、参加者共通の今するべきことについて述べている。続いて、土井が【予測】[11] 【観測】[8]、塚田が【観測】[8]、土井が【状況内推測】[6] と見込みを述べ、また土井が【状況内回想】[3] で過去の実績を述べる。

この話題内容ではこの後、町巡り博覧会という他組織の運営する企画の影響について【説明】[13] で交わされたあと、3. 募集 の話題にうつる。

3.1.3 3. 募集

表6に3. 募集 の冒頭部分の会話を示す。土井の「あとはまあ募集の時期ですね」【観測】[8] という発話をきっかけに、話題内容が募集にうつり、時期や定員についてのやりとりが交わされる。一ノ宮と土井を中心とする【観測】[8] と、土井と塚田を中心とする【説明】[13]、前年度の状況【状況内回想】[3] などとも交え、募集について話し合われる。

表 6 3. 募集 の冒頭部分

発話者	発話	修辞機能 [脱文脈度]
IC03 土井	あとまあ	観測 [8]
IC02 佐々木	そうですね。	
IC03 土井	募集の時期ですね。	
IC01 一ノ宮	大丈夫?。	
IC02 佐々木	募集も。	
IC02 佐々木	うーん。	
IC01 一ノ宮	うん。	
IC03 土井	とりあえず十一月: の:	
IC03 土井	えー あでもまあ。やっぱ 今回も 三十名	
IC03 土井	二十名 三十名ぐらい。	
IC01 一ノ宮	どうしよう。	観測 [8]
IC07 塚田	二十名。	
IC02 佐々木	二十名ですかね:。	

3.1.4 4. 原稿

表 7 に 4. 原稿 の冒頭部分の会話を示す。

表 7 4. 原稿 の冒頭部分

発話者	発話	修辞機能 [脱文脈度]
IC01 一ノ宮	と 原稿いつまでですか:?.	観測 [8]
IC03 土井	あ。えーとですね。	観測 [8]
IC03 土井	一応 九月の 頭で	
IC03 土井	あの ハ	
IC03 土井	えー なんだ 十月号にはこうゆうのを載せたいってゆう。	
IC03 土井	あ。違う。	観測 [8]
IC07 塚田	八月でしょう。	
IC03 土井	ごめんなさい。	
IC02 佐々木	うん。	計画 [4]
IC03 土井	えーっと 十月号に載せるから。	
IC03 土井	そうですね。	観測 [8]
IC03 土井	八月ですね。	
IC03 土井	八月の初旬になりますね。	

一ノ宮の「原稿いつまでですか?」【観測】 [8] という発話から、話題が原稿のことにうつっていく。原稿を書くのは一ノ宮で、管理者の土井は、【説明】 [13] によって原稿の締め切りやスペースのことなど情報を提供している発話が見られた。

3.1.5 5. 実地調査

表 8 に 5. 実地調査 の冒頭部分の会話を示す。

一ノ宮の「じゃ とりあえず七月の 集まる のはいつにしましょうか」【状況内予想】 [5] という発話がきっかけになり、話題がイベントの事前の実地調査の日程調整に移った。「これ

表 8 5. 実地調査 の冒頭部分

発話者	発話	修辞機能 [脱文脈度]
IC01 一ノ宮	じゃ とりあえず七月の 集まる	
IC05 落合	うん。	
IC04 佐久間	うん。	
IC01 一ノ宮	これ歩きだよね。また。	観測 [08]
IC01 一ノ宮	あの は いつ: に しましょう。	状況内予想 [5]
IC02 佐々木	そうですね。	
IC04 佐久間	暑いな。	説明 [13]
IC02 佐々木	暑く。	説明 [13]
IC06 岩瀬	暑いな。	説明 [13]
IC01 一ノ宮	暑いな。	説明 [13]
IC02 佐々木	時間帯と。	
IC07 塚田	夜にしますか?。	計画 [04]

歩きだよね」【観測】[8]の自己確認が途中に含まれている。この話題内容では、【説明】[13]と【自己記述】[7]が他の話題内容よりも多い割合で用いられている。【説明】[13]は「(七月に歩くのは)暑い」や、「(朝は気温が)まだ涼しい」など、実地調査をするときの気候についての発話があり、【自己記述】[7]は、「午後だったら十六でもいいけど」「わたし八時からでもいいですよ」や「ずっと連休だから」など各自の日程に関する発話である。

3.2 談話構造

第3.1節で示したように、それぞれの話題内容では、話題の切り替えの際にきっかけとなる発話があった。1. 会場の検討では、コースの最後の場所を確認する発話が該当し、2. 日程検討では、「だからこれ日にち的には一応十一月のどこかって感じですよ」、3. 募集では、「あとまあ、募集の時期ですね」、4. 原稿では「原稿いつまでですか」と、いずれも【観測】[8]によって話題内容の切り替えがおこなわれていた。ただし、5. 実地調査については、「じゃ とりあえず七月の集まるのはいつにしましょう」【状況内予想】[5]であった。

1. 会場の検討 2. 日程検討 3. 募集 4. 原稿の【観測】[8]は、時間要素が習慣・恒久で、空間要素が状況内という組み合わせで特定される修辞機能である。本研究の分析対象データのような恒例のイベントの企画打ち合わせでは、「(イベントの)会場は」「(イベントの)日程は」「われわれが検討すべきことは」などが参加者が共通して理解していることとして「状況内」に分類され、それらがどういう状況であるかを確認したり述べていることから【観測】[8]が特定されている。

一方5. 実地調査の【状況内予想】[5]は「(事前の実地調査として)7月に集まる」という参加者が共通して理解している「状況内」のことについて、「いつにしましょうか」という参加者の意志にかかわる表現であるため【状況内予想】[5]が特定されている。これは、図5に示されているように、5. 実地調査では他の話題内容と異なり、打ち合わせ参加者全員が発話している

ことと関連し、5つの話題内容の中では、最も積極的に参加が求められる話題内容であるためとも考えられる。

冒頭部分以外については、【観測】[8]と【説明】[13]が分析データの基本となる修辞機能で、それ以外の修辞機能の出現は、話題内容に関わると考えられる。1. 会場の検討では、会場の予約について、誰に頼むのがいいか、頼めるか、知り合いがいるかについて、【自己記述】[7]や【計画】[4]によって話されている。2. 日程検討では、過去のイベントからの今回のイベントへの【予測】[11]【状況内予想】[5]などが用いられている。3. 募集では、話題に出た「町巡り博覧会」への応募と過去の実績について【自己記述】[7]【状況内回想】[3]【状況外回想】[10]によって話されている。4. 原稿では、提出や掲載の計画【計画】[4]や原稿が間に合うか【状況内予想】[5]などが話されている。5. 実地調査では、自身の都合を述べる【自己記述】[7]が多く用いられている。

このことから、分析対象の打ち合わせ談話の話題内容の中では、次のような構造があることがうかがえた。

〈【観測】[8]/【状況内予想】[5] → 【説明】[13]・【観測】[8] (・話題内容に応じた修辞機能)〉

話題の始まりでは、【観測】[8]か【状況内予想】[5]で話題が提示され、それ以降は、【説明】[13]と【観測】[8]という基本的な修辞機能に加え、話題内容に応じた修辞機能が用いられる、というものである。

4. おわりに

本稿では、イベント企画打ち合わせ時の談話データを対象として、それぞれの発話について言語表現から修辞機能と脱文脈度を特定し、談話の話題内容によってどのような修辞機能が用いられているか、その話題の中で特徴的な構造がみられるかを確認した。分析の結果、分析対象の談話で用いられる修辞機能は、【観測】[8]【説明】[13]が基本となっているが、1. 会場の検討、2. 日程検討、3. 募集、4. 原稿、5. 実地調査という話題内容によって、頻度は異なり、それ以外の修辞機能の使用も異なることがわかった。また、話題の切り替え時に、5. 実地調査以外で【観測】[8]、5. 実地調査では【状況内予想】[5]が用いられ、その違いは、参加者の意志の有無であることから、話題内容と打ち合わせ参加者の関わりによって異なることがうかがえた。本稿では、一つの打ち合わせデータの分析であるため、このことがイベント企画打ち合わせの特徴であるかについては、今後他の打ち合わせ談話を分析することによってさらに確認していきたい。

謝 辞

本研究は国立国語研究所のプロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」、科研費基盤 (B)(特設分野研究)(18KT0035)、および科研費基盤 (C)(19K00588) によるものです。

文 献

- 渡邊ゆかり (2014a). 「少人数企画会議における、とりまとめ役の談話管理スタイル1 – とりまとめ役の発話単位量とムーブの観点から –」 広島女学院大学日本文学, 24, pp. 1–23.
- 渡邊ゆかり (2014b). 「少人数企画会議における、とりまとめ役の談話管理スタイル2 – とりまとめ役のターン譲渡と獲得の仕方の観点から –」 広島女学院大学国語国文学誌, 44, pp. 1–29.
- 現代日本語研究会 (2011). 『合本女性のことば・男性のことば (職場編):』 ひつじ書房
- ザトラウスキーポリー (1993). 『日本語の談話の構造分析: 勧誘のストラテジーの考察』 くろしお出版, 東京
- 鈴木香子 (2002). 「ラジオの医療相談の談話の構造分析」 早稲田大学日本語教育研究:1, pp. 117–130.
- 筒井佐代 (2012). 『雑談の構造分析』 くろしお出版, 東京
- 佐野大樹 (2010). 『日本語における修辞ユニット分析の方法と手順 ver.0.1.1: 選択体系機能言語理論 (システムック理論) における談話分析 (修辞機能編)』.
- 佐野大樹・小磯花絵 (2011). 「現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証 – 「書き言葉らしさ 話し言葉らしさ」と脱文脈化言語 文脈化言語の関係 –」 機能言語学研究, 6, pp. 59–81.
- 田中弥生・佐尾ちとせ・宮城信 (2021). 「児童作文の評価に向けた脱文脈化観点からの検討」 言語処理学会 第27回年次大会 発表論文集, pp. 750–755.
- 田中弥生・小磯花絵 (2020). 「家庭での幼児の発話の修辞機能: 脱文脈化の観点からの検討」 言語資源活用ワークショップ発表論文集, 4, pp. 106–118.
- 田中弥生 (2017). 「相談における談話構造: 修辞機能と脱文脈化の観点からの分析」 言語資源活用ワークショップ発表論文集, 1, pp. 69–78.
- 田中弥生・小磯花絵・大武美保子 (2022). 「脱文脈化の観点から見た共想法に基づく高齢者談話の分析」 国立国語研究所論集:22, pp. 137–155.
- 田中弥生・浅原正幸・小磯花絵 (2020). 「手順説明談話における脱文脈化の諸相」 言語処理学会第26回年次大会発表論文集, pp. 720–723.
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・良子川端・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香 (2022). 『『日本語日常会話コーパス』設計・構築・特徴』 6巻国語研究所「日常会話コーパス」プロジェクト報告書.
- C. Cloran (1994). “Rhetorical units and decontextualisation: An enquiry into some relations of context, meaning and grammar.” Unpublished doctoral dissertation, University of Nottingham Nottingham.
- C. Cloran (1999). “Contexts for learning.” Frances C (Ed.), *Pedagogy and the Shaping of Consciousness: Linguistic and Social Processes*. London: Continuum International Publishing. pp. 31–65.